対人依存傾向が視線方向判断に与える効果¹

石川 健太 専修大学 山口 美和子 社会福祉法人 翔の会
澤 幸祐 高田 夏子 大久保 街亜 専修大学

The effect of interpersonal dependency on judgment of gaze direction

Kenta Ishikawa (*Senshu University*), Miwako Yamaguchi (*Social Welfare Service Corporation Shounokai*),
Kosuke Sawa, Natsuko Takata, and Matia Okubo (*Senshu University*)

This study investigated the effect of interpersonal dependency on judgments of gaze direction of individuals with different facial expressions. Based on interpersonal dependency scores, 46 participants were divided into two groups (high interpersonal dependency and low interpersonal dependency). Participants judged the gaze direction of photographs of faces with angry, neutral or happy expressions. Relative to the low interpersonal dependency group, the high interpersonal dependency group was more accurate in the judgments of gaze direction. This tendency was more salient for the happy and neutral expressions than for the angry expressions. Since people with high interpersonal dependency are highly motivated to seek support from others, this result suggests that they are sensitive to signals with pro-social information such as the gaze direction of others with positive attitudes.

Key words: interpersonal dependency, gaze direction, facial expression.

The Japanese Journal of Psychology
2014, Vol. 85, No. 1, pp. 87-92

対人依存とは、他者に対する意識的、非意識的な強い依存欲求をもち、他者からの承認や支持を過度に求めることなどに特徴づけられるパーソナリティ特性である (Bandura & Walters, 1963; Bornstein, 1993)。先行研究において他者に対する依存性の高さは、不安障害や抑うつなどの精神疾患や心筋梗塞などの身体疾患の危険因子として扱われてきた (Bornstein, 1999; Darcy, Davila, & Beck, 2005; Davila & Beck, 2002; Greenberg & Bornstein, 1988; Overholser, 1992)。例えば Darcy et al. (2005) では、対人依存と社交不安障害との関連を指摘した。この研究では、社交不安に特徴づけられる回避特性と他者との関係性に着目した。調査の結果、社交不安をもつ人は他者からの回避特性をもつだけでなく、両親や恋人などの親密な対人関係において、高い依存性をもつことが示唆された。また、Overholser

(1992) では、依存的なパーソナリティ特性はうつ病に対する脆弱性を高める可能性も指摘されている。Overholser (1992) は大学生を対象とした研究で、依存性が高い人ほど抑うつ的であり、さらに依存性の高低による違いは 10 ヶ月後の追跡調査においても有意であることを報告した。対人依存とうつ病との関連はその後の研究においても報告されており (Blatt, Zohar, Quinlan, Zuroff, & Mongrain, 1995; Santor, 2003)、対人依存が種々の精神疾患や身体疾患の危険因子であることを裏づける。

一方、これまでの対人依存に関する研究では、対人依存の不適應的な側面だけではなく適應的な側面もまた報告されてきた (Nacev, 1980; O'Neill & Bornstein, 2006; Parker & Lipscombe, 1980; Poldrugo & Forti, 1988)。これらの研究では、対人依存が高い人は病気の症状が現れた際に、医療機関に繋がるまでの期間が短いことや身体的、精神的な疾患に対する医療機関の利用頻度が高いことなどが報告された (Nacev, 1980; Parker & Lipscombe, 1980; Poldrugo & Forti, 1988)。また、医療機関を使用した場合、スタッフとの良好な関係を築くことができるだけでなく、治療に対する満足感や治療効果そのものも高いことが示唆された

Correspondence concerning this article should be sent to: Kenta Ishikawa, Graduate School of the Humanities, Senshu University, Higashimita Tama-ku, Kawasaki 214-8580, Japan (e-mail: cognition.psy.k@gmail.com)

¹ 本研究の一部は、平成 23—27 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 (S1101013) の助成を受けた。

(Clough, 1980; O'Neill & Bornstein, 2006; Parker & Lipscombe, 1980)。このように対人依存が高いことは、心身に対して必ずしもネガティブな影響を与えるだけではなく、ポジティブな側面も併せもつ。

このような特徴をもつ対人依存特性には、どのような心的なメカニズムが関わっているのだろうか。Bornstein (1992) は対人依存の背景に無力な自己スキーマが関わることを指摘した。無力な自己スキーマとは自己の無力感に関わるスキーマであり、このスキーマが活性することによって依存に関係した動機づけ、行動、感情反応が生じるだけでなく、依存に関わる情報への感度が高くなることを主張した (Bornstein, 1992; Bornstein, Ng, Gallagher, Kloss, & Regier, 2005)。このモデルを支持する研究として Bornstein et al. (2005) の実験がある。Bornstein et al. (2005) は helpless, weak, needy などの依存関連語と book, table, frame などの非依存関連語を用いたプライミング課題を行った。その結果、高対人依存群は低対人依存群よりも依存関連語への反応が速かった。Bornstein et al. (2005) は対人依存が高い人の依存関連情報に対する敏感さには無力な自己スキーマが関わり、このスキーマが対人依存の重要な要因となることを主張した。

高い対人依存傾向をもつ人は依存関連情報だけでなく、他者の態度に対しても敏感であることを示唆する研究がある (Juni & Semel, 1982; Masling, Johnson, & Saturansky, 1974; Masling, O'Neill, & Katkin, 1982)。例えば、Masling et al. (1974) の実験では、参加者は 2 人 1 組で 15 分間のフリートークを行った。その後、参加者に考え方や態度、日々の習慣や行動などについての質問紙を配布し、双方が自分と相手について評定を行い、相互の評定内容の一致率を集計した。その結果、対人依存傾向と回答の一致率には正の相関があり、対人依存傾向が高い人は他者の態度や行動に敏感であることが示唆された。このように、対人依存傾向が高い人は他者の態度などに敏感であることが報告されてきた。しかしながら、他者の態度や行動のどのような側面に対して敏感になるのかは十分に明らかにされていない。本研究の目的は実験的、直接的な課題パフォーマンスを測定することによって、高い対人依存傾向をもつ人の他者の態度や行動に対する敏感さを検討することである。

他者の態度や行動のなかでも、表情や視線はその人の意図や目的を伝える重要な社会的信号の役割があり、これらの信号は他者の評価や観察者の対象に対する接近や回避行動と関係する (Adams & Kleck, 2003; Bayliss & Tipper, 2006; Mason, Hood, & Macrae, 2004)。先行研究では対人依存が高い人は、他者の態度や行動に対して敏感であることが示唆された (Juni & Semel, 1982; Masling et al., 1974; Masling et al., 1982)。他者が表出する視線や表情などの社会的信号は、依存に関す

る手がかり、つまり依存関連情報として機能する可能性がある。したがって本研究では、対人依存傾向の高い人は低い人に比べて、他者の視線や表情に対する感度が高くなるため、他者の視線方向に対する情報処理が高まり、視線方向判断が正確になるという仮説を設定した。この仮説を検証するために、本研究では Jenkins, Beaver, & Calder (2006) が使用した視線判断課題を用いることで、対人依存傾向が他者の表情認知や視線判断に与える効果の検討を行った。仮説に基づく、対人依存傾向が高い人は低い人より依存関連情報に対して敏感であるため (Bornstein, 1992; Bornstein et al., 2005)、視線判断課題の正答率が高くなると予測される。さらに Adams & Kleck (2003) によれば、否定的な表情は回避動機を促進させ、さらにこうした否定的な態度は対人依存傾向が高い人の回避動機を高めるため、依存対象として不適切である (Bornstein et al., 2005)。そのため、対人依存傾向が低い人と比べて高い人は、怒り顔などのネガティブな表情よりも、中立顔や笑い顔などの表情に対する正答率が高くなるであろう。

方 法

参加者 参加者は大学生 46 名 (男性 20 名、女性 26 名)、平均年齢は 22.85 歳、標準偏差は 1.66 であった。他者への依存性を測定するために竹澤・小玉 (2004) による対人依存欲求尺度を用いた。この尺度は 20 項目からなり、評定方法は“全くそう思わない” — “いつもそう思う” の 6 件法であった。参加者の対人依存欲求得点は平均 73.24 ($SD = 16.85$)、中央値 73 であった。対人依存欲求得点が中央値である 73 以上の 24 名 (男性 8 名、女性 16 名) を対人依存高群、73 未満の 22 名 (男性 12 名、女性 10 名) を対人依存低群とした。両群の対人依存欲求得点の差を検定した結果、有意差があり ($t(44) = 8.92, p < .001$)、対人依存高群の方が低群よりも対人依存欲求得点が高かった。

刺激 石川・岡村・大久保 (2012) が作成した顔表情刺激を使用した。これらは男女混合で 10 名のモデルによる顔表情刺激で構成された。表情は怒り、笑い、中立顔の計 3 種類であり、それぞれの表情の視線方向は正面、左 3°、左 6°、左 9°、右 3°、右 6°、右 9° の計 7 方向、合計で 210 枚であった。これらの刺激はグレースケールに処理し、画像サイズは 126.7 mm × 80 mm (視角は 12.1° × 7.6°) であった。

装置 実験装置には IBM-AT 互換性のデスクトップ型パソコンを使用した。刺激の提示には MITSUBISHI 社製の Diamondscan Flat の 17 インチモニターを用いた。画面の画像解像度は 1,280 × 1,024 pixels であった。ディスプレイまでの観察距離は 60 cm であった。刺激の提示プログラムには Windows 版 SuperLab 4.0 を使用した。

視線判断課題 実験試行がはじまるとパソコン画面の中央に注視点が750 ms提示され、続いて顔表情刺激が1,500 ms提示された。参加者は顔表情刺激が正面、右、左のいずれかを向いているか判断し、キーボードを用いて反応した。実験の全試行数は写真のモデル(10人)×表情(怒り、笑い、中立顔)×視線方向(7条件:0°, 左右3°, 6°, 9°)×2ブロックからなり、合計で420試行であった。また、参加者の負担を避けるため、参加者の判断で自由に休憩を取れるよう配慮した。さらに、1ブロックが終わった際には必ず休憩を取るよう教示した。本実験を行う前に35試行の練習試行を行い、参加者が実験に十分に慣れたことを確認した後に実験を開始した。なお、練習試行で提示された写真は、本実験で用いられたものとは別の顔写真であった。

結果

実験計画は対人依存(高群、低群)×性別(男性、女性)×表情(怒り顔、笑い顔、中立顔)×視線方向(0°, 左右3°, 6°, 9°)の参加者間2要因、参加者内2要因の4要因混合計画であった。実験計画に示した条件について、視線判断に対する正答率を算出し分析を行った²。分散分析の結果、表情の主効果が有意であり($F(2, 88) = 88.1, p < .001, \eta_p^2 = .67$)、表情ごとの平均正答率は中立顔が最も高く、怒り顔、笑い顔の順で低下した。視線方向の主効果も有意であり($F(6, 264) = 232, p < .001, \eta_p^2 = .85$)、正面、左右9°の正答率が高く、左右6°, 左右3°と視線方向が曖昧になると正答率は低下した。Figure 1に示したように、対人依存と表情の交互作用が有意であったため($F(2, 88) = 8.4, p < .001, \eta_p^2 = .16$)、表情ごとに対人依存×視線の2要因の分散分析を行った。

Figure 1が示すように、笑い顔では対人依存の主効果があり($F(1, 44) = 5.2, p < .001, \eta_p^2 = .1$)、対人依存低群よりも対人依存高群の方が視線判断課題の正答率が高かった。

また、視線の主効果が有意であり($F(6, 264) = 186.7, p < .001, \eta_p^2 = .8$)、さらに対人依存と視線の交互作用も有意であったため($F(6, 264) = 3.2, p = .01, \eta_p^2 = .07$)、各視線方向に対して対人依存高群と低群の正答率の違いを検討した。その結果、視線方向が左9°—3°で対人依存高群と低群で有意差があり($ps < .05$)、いずれの条件も対人依存高群の方が低群よりも正答率が高かった。

中立顔もまた対人依存の主効果があり($F(1, 44) = 4.5, p < .01, \eta_p^2 = .09$)、対人依存低群よりも対人依存高群の方が視線方向判断の正答率が高かった。視線の主効果($F(6, 264) = 191.6, p < .01, \eta_p^2 = .81$)、対人依存と視線の交互作用も有意であったため($F(6, 264) = 2.43, p = .02, \eta_p^2 = .05$)、各視線方向に対して対人依存高群と低群の正答率の違いを検討した。中立顔では視線方向が左6°—3°で対人依存高群と低群で有意差があり($ps < .05$)、どちらの条件も対人依存高群の方が低群よりも正答率が高かった。笑い顔や中立顔と異なり、怒り顔の対人依存の主効果はなかった($F(1, 44) = .22, ns$)、対人依存の高低で視線方向判断の正答率に違いがなかった。視線の主効果は有意であったが($F(6, 264) = 133.3, p < .001, \eta_p^2 = .75$)、対人依存と視線の交互作用は有意でなかった($F(6, 264) = 1.3, ns$)。

さらに対人依存と表情の交互作用が有意であったため($F(6, 264) = 2.8, p < .01, \eta_p^2 = .06$)、対人依存高群と低群ごとに、視線×表情の2要因の分散分析を行った。対人依存高群では表情の主効果が有意であったため($F(2, 46) = 38.2, p < .01, \eta_p^2 = .62$)、Bonferroni法を用いた多重比較を行った。その結果、Table 1に示すように全ての表情の間で有意差があり、中立顔の正答率が70%と最も高く、怒り顔64%、笑い顔が60%であった($ps < .01$)。視線の主効果($F(6, 138) = 126.0, p < .001, \eta_p^2 = .84$)、表情と視線の交互作用が有意であり($F(12, 276) = 4.76, p < .01, \eta_p^2 = .17$)、視線方向に関わらず中立顔に対する正答率が、他の表情よりも高い傾向があった。

対人依存低群においても、表情の主効果が有意であったため($F(2, 42) = 72.3, p < .01, \eta_p^2 = .77$)、Bonferroni法を用いた多重比較を行った。その結果、対人依存高群と異なり、中立顔と怒り顔の正答率はおおよそ60%であり有意差はなかったが、笑い顔と中立顔、笑い顔と怒

Figure 1. Percentage of correct responses in gaze direction judgments.

Note. Error bars indicate standard errors.

² 本実験では反応時間の測定は行わず、分析していなかった。これは実験のデザインとして、いくつかの条件で誤答が非常に多く、正答のみを分析対象とする反応時間の分析は困難であることや、データポイント数が少なくなることで点推定(平均値の推定)にバイアスが生じるためである(Miller, 1988; Ratcliff, 1993)。

Table 1
Percentages of correct responses in gaze direction judgments as functions of
interpersonal dependencies, facial expressions and gaze directions

High interpersonal dependency							
Face	Gaze direction (°)						
	L9	L6	L3	0	R3	R6	R9
Happy	81.3 (3.4)	61.9 (3.8)	36.9 (2.7)	80.0 (1.9)	22.7 (2.5)	56.0 (3.9)	83.5 (3.7)
Neutral	92.1 (3.3)	74.2 (4.1)	36.7 (2.9)	86.2 (2.3)	35.8 (3.9)	74.2 (3.8)	91.5 (2.8)
Angry	85.6 (2.7)	63.8 (3.5)	33.5 (3.3)	79.6 (3.0)	36.5 (3.1)	61.3 (3.6)	87.7 (3.3)
Low interpersonal dependency							
Face	Gaze direction (°)						
	L9	L6	L3	0	R3	R6	R9
Happy	77.1 (3.6)	48.9 (4.0)	24.3 (2.8)	85.2 (2.0)	19.1 (2.6)	45.5 (4.1)	75.9 (3.9)
Neutral	83.4 (3.5)	59.1 (4.2)	25.0 (3.0)	88.6 (2.4)	29.5 (4.1)	65.0 (4.0)	88.2 (2.9)
Angry	80.0 (2.9)	58.6 (3.7)	29.8 (3.4)	84.6 (3.1)	39.3 (3.3)	62.5 (3.8)	82.7 (3.5)

り顔で有意差があり ($ps < .01$), 笑い顔の正答率が低かった。性別×グループ×表情×視線の交互作用が有意であったため ($F(12, 504) = 2.2, p < .01, \eta_p^2 = .05$), 表情ごとに性別×グループ×視線の分析を行った。その結果, 中立顔のみで性別×グループ×視線の交互作用が有意であった ($F(6, 252) = 2.3, p = .04, \eta_p^2 = .05$)。そこで, グループごとに性別×視線の分析を行った。その結果, 対人依存低群のみで性別と視線の交互作用が有意であり ($F(6, 144) = 2.9, p < .01, \eta_p^2 = .1$), 視線方向ごとに男女の正答率を比較すると, 視線方向が0°, 左3°の条件でのみ有意差があった ($ps < .03$)。0°条件では男性の方が女性よりも視線方向判断の正答率が高く (男性 = 93%, 女性 = 83%), 左3°では女性の方が男性よりも正答率が高くなった (男性 = 18%, 女性 = 32%)。

考 察

実験の結果, 笑い顔, 中立顔において対人依存の主効果があり, 対人依存が高い人は低い人よりも他者の視線方向を正確に判断できることが示唆された。この結果は Juni & Semel (1982) や Masling et al. (1974), Masling et al. (1982) が報告したように, 対人依存が高い人は低い人よりも, 他者の態度や行動に対して敏感であるという結果と一致する。Bornstein et al. (2005) は, 対人依存が高い人は無力な自己スキーマの活性によって, 依存に関わる情報への感度が高くなると報告した。対人依存が高い人にとって, 他者の視線方向は援助行動を求める対象として適切与否かを判断する上で重要な情報であると考ええる。これらの情報に対して敏感になることによって, より効率的に他者からの援助行動を引き出すことが可能になるかもしれない。これまでの先行研究の多くは質問紙法を用いることで, 対人依存が高い人は他者の態度に敏感であることを報告してきた (Juni & Semel, 1982; Masling et al., 1974)。

ただし, これらの研究ではコミュニケーションのこういった側面が過敏さに関わるのか十分にはわからない。本研究では, 表情と視線について実験を用いることによって, より直接的に対人依存と他者への過敏さの関連を新たに示したものである。

先行研究では言語刺激を用いた課題で, 対人依存が高い人は依存関連情報に対して敏感であることが報告された (Bornstein et al., 2005)。本研究では他者の視線と表情という非言語的な刺激を用いることで, 対人依存が高い人の他者への過敏さを検討した。その結果, 言語刺激と同様に表情などの非言語刺激に対しても, 対人依存傾向が高い人は敏感であることが示唆された。この結果は, 対人依存傾向が高い人にとって他者の表情や視線は, 他者が依存対象として適切であるか否かを判断する上で重要な依存関連情報になる可能性を示唆する。

実験では, 笑い顔と中立顔において, 対人依存高群は低群と比べて視線方向判断の正答率が有意に高かった。こうした結果は, Masling et al. (1982) の報告を裏づけるものであり, 対人依存が高い人は, 他者の中立顔や笑い顔の視線方向に対して敏感に察知し, その人が依存対象となりうるかを判断することに長けていることを示唆すると考える。一方, 怒り顔においては対人依存高群と低群の成績に有意差はなかった。他者の怒り顔はその人のネガティブな感情状態を表し観察者の回避動機を高めるため, 依存対象としては不向きである (Adams & Kleck, 2003)。他者への依存は接近動機に関わる欲求であり (Bornstein et al., 2005), 対人依存が高い人にとって, 他者の怒りというネガティブな情報よりも, 中立顔や笑い顔などの感情情報を選択的に捕捉する方が, 他者との依存関係を築く上でより適応的であろう。そのため, 中立顔や笑い顔における視線方向判断の正答率が, 対人依存低群よりも高群の

方が高くなったのかもしれない。

各表情における、対人依存高群と低群の視線方向の正答率を比較すると、笑い顔、中立顔では左方向の視線について、対人依存高群の方が低群よりも正答率が高かった。右方向、あるいは正面に対する視線方向に違いがなかったことは、顔の情報処理に対する左視野（右半球）優位性が関係しているかもしれない（Bourne, 2008; Levy, Heller, Banich, & Burton, 1983）。Levy et al. (1983) のキメラ顔を用いた実験では、参加者の右視野よりも左視野側に表情が現れているキメラ顔に対する選択率が高いことから左視野（右半球）優位性を示唆した。また、Wang, Wang, Gu, Drake, Livesley, & Jang (2003) は、線分二等分課題を行った際に、対人依存が高い人は、健常者よりも左視野（右半球）優位性が高かった。Wang et al. (2003) が示唆したように、対人依存が高い人は右半球の活性が高いと仮定すると、本研究においても対人依存が高い人は低い人よりも、左視野（右半球）優位性が強く生じているのかもしれない。そのため、左方向に対する感度が高くなり、左方向の視線判断だけに差が生じていたのではないか。ただし、本研究では左視野（右半球）の優位性について直接的な測定は行っていないため、今後の研究課題であると考ええる。

対人依存高群、低群ともに笑い顔の正答率が最も低かった。したがって、対人依存傾向が高い人は低い人よりも、笑い顔や中立顔などの表情に敏感であるという仮説と完全には一致しないかもしれない。ただし、笑い顔における正答率の低下は表情の変化による強膜の露出が関わっていると考ええる。石川・岡村・大久保 (2012) では怒り顔や中立顔よりも笑い顔の強膜の露出が低下していることを報告した。実験結果では強膜の露出の低下によって判断が難しい状況においても、笑い顔の正答率は対人依存高群の方が低群よりも高かった。この結果によって、対人依存が高い人は低い人よりも、怒り顔と比べて笑い顔や中立顔の視線に対して敏感であることが示唆されるであろう。対人コミュニケーションにおいて、笑い顔や中立顔などの感情情報を示している他者は、対人依存が高い人にとって依存対象として適切であると考えられる。そして、これらの感情情報がどこに向けられているかを正確に判断することは、効率的な依存関係の構築に繋がるのではない。

中立顔において、対人依存低群では視線方向が正面、左 3° の条件で、視線方向判断の正答率が男女で異なるパターンを示した。Bayliss, de Pellegrino, & Tipper (2005) は、女性の方が男性よりも他者の視線に対して敏感であることを報告した。本研究の結果は、このような先行研究で報告された視線情報処理の性差と必ずしも一致しない。しかしながら、こうした傾向は対人依存低群において、中立顔にのみ生じている現象で

あり、本研究で示唆した対人依存傾向の高低が視線判断に与える効果について、何ら矛盾するものではないと考える。

本研究の結果は、これまで十分に明らかにされていなかった、対人依存と視線と表情との関連について言及し、対人依存が高い人の対人認知のメカニズムを明らかにしたものである。こうしたメカニズムを明らかにすることは、対人依存の適応的・不適応的側面がどのように生じるのかを理解する上で重要なものとなるだろう。

引用文献

- Adams, R. B. Jr., & Kleck, R. K. (2003). Perceived gaze direction and the processing of facial displays of emotion. *Psychological Science*, **14**, 644–647.
- Bandura, A., & Walters, R. H. (1963). *Social learning and personality development*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Bayliss, A. P., di Pellegrino, G., & Tipper, S. P. (2005). Sex differences in eye gaze and symbolic cueing of attention. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **58**, 631–650.
- Bayliss, A. P., & Tipper, S. P. (2006). Predictive gaze cues and personality judgements: Should eye trust you? *Psychological Science*, **17**, 514–520.
- Blatt, S. J., Zohar, A. H., Quinlan, D. M., Zuroff, D. C., & Mongrain, M. (1995). Subscales within the dependency factor of the depressive experiences questionnaire. *Journal of Personality Assessment*, **64**, 319–339.
- Bornstein, R. F. (1992). The dependent personality: Developmental, social, and clinical perspectives. *Psychological Bulletin*, **112**, 3–23.
- Bornstein, R. F. (1993). *The dependent personality*. New York: Guilford Press.
- Bornstein, R. F. (1999). Criterion validity of objective and projective dependency tests: A meta-analytic assessment of behavioral prediction. *Psychological Assessment*, **11**, 48–57.
- Bornstein, R. F., Ng, H. M., Gallagher, H. A., Kloss, D. M., & Regier, N. G. (2005). Contrasting effects of self-schema priming on lexical decisions and interpersonal stroop task performance: Evidence for a cognitive/ interactionist model of interpersonal dependency. *Journal of Personality*, **73**, 731–761.
- Bourne, V. J. (2008). Chimeric faces, visual field bias, and reaction time bias: Have we been missing a trick? *Laterality*, **13**, 92–103.
- Clough, D. H. (1980). A behavioral checklist to measure dependence and independence. *Nursing Research*, **29**, 55–58.
- Darcy, K., Davila, J., & Beck, J. G. (2005). Is social anxiety associated with both interpersonal avoidance and interpersonal dependence? *Cognitive Therapy and Research*, **29**, 171–186.
- Davila, J., & Beck, G. (2002). Is social anxiety associated

- with impairment in close relationships? A preliminary investigation. *Behavior Therapy*, **33**, 427–446.
- Greenberg, R. P., & Bornstein, R. F. (1988). The dependent personality: I. Risk for physical disorders. *Journal of Personality Disorders*, **2**, 126–135.
- 石川 健太・岡村 陽子・大久保 街亜 (2012). 社会不安傾向者の視線方向判断——表情と解釈バイアス—— 心理学研究, **83**, 225–231.
- (Ishikawa, K., Okamura, Y., & Okubo, M. (2012). Judgment of gaze direction related to social anxiety: Facial expressions and interpretation biases. *Japanese Journal of Psychology*, **83**, 225–231.)
- Jenkins, R., Beaver, J. D., & Calder, A. J. (2006). I thought you were looking at me direction-specific after effects in gaze perception. *Psychological Science*, **17**, 506–513.
- Juni, S., & Semel, S. R. (1982). Person perception as a function of orality and anality. *Journal of Social Psychology*, **118**, 99–103.
- Levy, J., Heller, W., Banich, M. T., & Burton, L. A. (1983). Asymmetry of perception in free viewing of chimeric faces. *Brain and Cognition*, **2**, 404–419.
- Masling, J., Johnson, C., & Saturansky, C. (1974). Oral imagery, accuracy of perceiving others, and performance in Peace Corps training. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 414–419.
- Masling, J., O'Neill, R. M., & Katkin, E. S. (1982). Autonomic arousal, interpersonal climate, and orality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 529–534.
- Mason, M. F., Hood, B. M., & Macrae, C. N. (2004). Look into my eyes: Gaze direction and person memory. *Memory*, **12**, 637–643.
- Miller, J. (1988). A warning about median reaction time. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, **14**, 539–543.
- Nacev, V. (1980). Dependency and ego strength as indicators of patients' attendance in psychotherapy. *Journal of Clinical Psychology*, **36**, 691–695.
- O'Neill, R. M., & Bornstein, R. F. (2006). Interpersonal dependency as a predictor of satisfaction with inpatient hospital treatment. *Individual Differences Research*, **4**, 129–137.
- Overholser, J. C. (1992). Interpersonality dependency and social loss. *Personality and Individual Differences*, **13**, 17–23.
- Parker, G., & Lipscombe, P. (1980). The relevance of early parental experiences to adult dependency, hypochondriasis, and utilization of primary care physicians. *British Journal of Medical Psychology*, **53**, 355–363.
- Poldrugo, F., & Forti, B. (1988). Personality disorders and alcoholism treatment outcome. *Drug and Alcohol Dependence*, **21**, 171–176.
- Ratcliff, R. (1993). Methods for dealing with reaction time outliers. *Psychological Bulletin*, **114**, 510–532.
- Santor, D. A. (2003). Proximal effects of dependency and self-criticism: Conceptual and methodological challenges for depressive vulnerability research. *Cognitive Behaviour Therapy*, **32**, 49–67.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, **52**, 310–319.
- (Takezawa, M., & Kodama, M. (2004). Development of an interpersonal dependency scale: A positive view of dependency. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **52**, 310–319.)
- Wang, W., Wang, Y., Gu, J., Drake, R. A., Livesley, W. J., & Jang, K. L. (2003). Line bisection performance in patients with personality disorders. *Cognitive Neuropsychiatry*, **8**, 273–285.

—— 2013. 1. 19 受稿, 2013. 9. 7 受理 ——